

〈刊行紹介〉

市町村行30周年記念出版

「概説八戸の歴史」中巻一、二

大川 哲 夫

本書は、北方春秋叢書として、前に発刊された古代篇、中世篇に引き続いて、近世篇として、中巻一は盛田純、野田健次郎の両氏、中巻二は盛田氏が各々執筆され、八戸社会経済史研究会が編纂にあたったものである。

今、盛田氏の執筆にあたっての意図を通じて本書の性格をみるに、氏は先ず「八戸の人々に読んでいただくのが第一であるのは勿論であるが」と前置きして、「日本歴史上のいろいろな問題の解明に少しでも貢献したいというねらいもあつた」とし、その意図からしても「平板な通史の体系を探らずに、問題意識をもった特殊研究の積み重ね方式」を採用したと云うところに、その性格が窺われよう。

扱て、これら二巻の内容を問題点を拾いながら紹介しよう。中巻一は、先ず「八戸藩の誕生」に

於いて、八戸藩成立事情、藩政確立の諸問題を中心に寛文―元禄期を扱い、特に、藩成立については、八戸藩は盛岡藩の支藩であるが如き一般の言えを改めて、「二藩は分立した」事実を論証。其次の「安永昌益」の章では、従来ノーマンが昌益を秋田の人間として、その風土から論じたに反論し、八戸藩の宝暦期前後の政情を説きつゝ、その中に昌益の思想の展開を位置付けている。又、「商人を抬頭」では、八戸藩の商業の発達を、代表的三商人の系譜を追いつゝ究明し、更に、これら外来商人が、藩の財政経済政策の一翼の担当者になるその実態を明らかにしている。

中巻二に於いては、八戸藩の金融構造、藩の財政事情、最後に藩政改革を文政―天保の改革を中心に論じている。先ず金融構造のうへ、元禄元年創始の飭^{ちゅう}制度について云え、盛岡藩の模倣でありながら、三つの相違点を有することを指摘し、元来、参勤交代時の諸士の諸経費負担にあつての相互制度的損害保険類似の制度として発足しながら、同時に債付金制度を設けて四民の生活、管

米資金にあつて、これが藩政上での意義の大なることを指摘している。尋いで藩政改革について及ばば、天明―寛政期と文政―天保期との改革の性格を区別して、前者は「封建的危機を認識した等藩一政の危機克服」でないといひ後者は、「封建的危機の要因が商業資本の隆盛と、小商品生産興隆にある」ことを認識した上での「徹底的商品制の確立」であるとする。更に、この改革が特権商人との結合に依つて行われたことから「封建的藩政を完全に再建」するに止まつて「幕藩体制停止の方向への動きが下層武士団の中に全然みられなかつた」と、改革の限界と性格を論じている。

以上の各論に於て、多数の史料を掲げて、八戸藩の政の向題としてではなく、日本近世史の諸向題を鋭く論究されている吳、執筆者の意圖を如実に反映していると云えよう。たゞ、文化史、産業史に全くふれてないのは残念である。

（新書判、中1二三〇頁、中2二三七頁、各巻二八〇円、千四〇円、八戸市二十八日町

ほんの虫書店内 北方春秋発行）